

# 多様性ある社会的連携・協働の構築に関する研究

## －外国人地域生活サポーターと地域活動を考える－

鳥居美佳子\*<sup>1</sup>・大塚ゆかり\*<sup>1</sup>・里見達也\*<sup>1</sup>・長坂香織\*<sup>2</sup>

和文キーワード：多様性、多文化共生、協働、地域活動

### 1. はじめに

山梨県には17,000人を超える外国人が住んでおり、母国と異なる文化やルールに不安や悩みを抱えながら生活をしている。山梨県は、外国人が安心して暮らせる環境を整備するため、2020年6月、地域の身近な支援員として山梨県外国人地域生活サポーター制度を設置した。2021年3月時点で37名のサポーターが登録し、14か国のコミュニティとつながって活動している。サポーターの役割は、地域において、外国人に対し①日常生活における悩み事の相談対応、②日常生活に関する情報提供や地域活動への参加促進を行うことであるが、これまでに、活動の実態や課題については報告されていない。

「山梨県在留外国人アンケート調査 調査結果報告書<sup>1)</sup>」では、約45%が地域活動に参加していないものの、そのうち約半数は今後の地域活動への参加意向があると回答している。参加したい理由としては、「日本の文化や習慣を学びたいから」が最も多く(61.3%)、「地域の人と交流したいから」(58.7%)、「日本ででの生活を楽しみたいから」(53.5%)が続いている。外国人は、地域活動に対し、地域の人と交流しながら日本の文化や習慣を学べたり、日本ででの生活を楽しめたりする場や機会となることを求めていることが推測できる。しかし、前述した調査によって報告されている地域活動への参加度からは、そのニーズが十分に満たされていない現状が窺える。その原因として、外国人のニーズを満たすような地域活動が実施されてないこと、あるいは、仮に参加すればニーズを満たせる地域活動が実施されていたとしても外国人にとって参加しづらい理由が存在していることが考えられる。

本学の地域研究交流センター共同研究では、教育、福祉および医療の各領域において様々な支援活動<sup>2~6)</sup>が実践されてきたが、「支援する者」「支援される者」という二項対立的な関係性があり、総務省による「対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていく」多文化共生の地域づくりが実現していない現状がある。外国人住民が地域の構成員として地域コミュニティに参加する／できる環境を整え、日本人住民との互助の関係を構築するためには、両者の交流のきっかけとなる「イベント的な交流」を増やすと同時に、地域コミュニティ参加に向けた「住民同士の交流」へと展開するための支援の重要性が示唆されている<sup>7)</sup>。これらのことから、外国人の地域活動に対するニーズを満たすためには、「支援する者」が企画し「支援される者」を招待する形式の「一方向型地域活動」ではなく、多様な背景を持つ人が誰でも気軽に参加できる「協働の場」としての「双方向型地域活動」が必要ではないかと考えるに至った。

本研究は、多様な人にとって「協働の場」となるような「双方向型地域活動」の実現に必要な条件を検討し、今後の地域活動の方向性を見出し、多様性ある社会的連携・協働の構築の一助とすこ

---

(所 属)

\* 1 山梨県立大学人間福祉学部

\* 2 山梨県立大学看護学部

とを目的とした。地域活動への参加促進を行う役割を担っている外国人地域生活サポーターを対象とし、外国人が参加しやすい地域活動についてインタビュー調査を実施した結果を報告する。

## 2. 方法

### 1) 参加者

参加者は、山梨県外国人地域生活サポーター4名であった。参加者は、それぞれブラジル（2名）、中国およびベトナム（それぞれ1名）のコミュニティとつながっている。4名とも出身地は日本以外であるが、現在は山梨県に在住し、子育て経験のある女性であった。参加者の選定にあたっては、山梨県知事政策局国際戦略グループの外国人地域生活サポーター担当者の協力を得た。県の担当者を通して、山梨県内在住者数の比較的多い国の5つのコミュニティとつながりのある外国人地域生活サポーター登録者（日本出身者を除く）に対して、①グループインタビューの目的、②方法、③時期、④場所、⑤名前が外部に公表されることはないこと、⑥問い合わせ先などを文書にて説明し、協力を希望すると回答のあった者の中から、つながりのあるコミュニティや出身地などがなるべく偏らないように4名を決定した。

### 2) 調査方法

調査は、2022年6月に実施した。場所は、山梨県立大学内の静かな個室とし、参加者の承諾を得てICレコーダーとビデオカメラを設置し記録した。また、観察者は、参加者の発言内容や様子を観察し、発言時の様子を手記により記録した。

インタビュー調査開始前には自己紹介を行い、インタビュー中は、参加者の名前の代わりに仮名（A、B、C、D）を付して呼び合うこととし、名前が公表されないことを保証した。所要時間は90分とし、参加者が話しやすい雰囲気となるよう配慮した。

半構造化面接法により、以下4点について、面接者（進行者）が質問した。

- ①現在、把握している外国人コミュニティにおける課題はどのようなことですか。
- ②外国人が地域活動に参加しづらい理由は何だと思えますか。
- ③外国人が参加しやすい地域活動は、どのような内容でしょうか。
- ④外国人に参加を促進しやすい地域活動は、どのような企画でしょうか。

### 3) 倫理的配慮

参加者に対して、研究目的と意義、成果を公表する時の個人情報の保護、成果の公表方法、研究協力の可否は自由意思を尊重すること、本研究への同意が得られなくても何ら不利益を受けることはないこと、途中で辞退できることについて、文書および口頭で説明し、同意を得た。本研究は、山梨県立大学人間福祉学部倫理審査委員会の承認を得て実施した（No.2021-7）。

### 4) 分析方法

安梅<sup>8)</sup>を参考に、以下の手順で分析を行った。ICレコーダーに録音された記録から逐語録を作成した。複数の分析者で確認しながら、本研究の問いに照合して、重要な言葉（重要アイテム）を抽出した。抽出した重要アイテムのうち本研究の問いに対する解となるテーマについて、カテゴリーを抽出し、類型化した。

### 3. 結果

#### 1) 外国人が参加しやすい地域活動の要素

分析の結果、外国人が参加しやすい地域活動の要素は、【活動内容】【活動規模】【活動場所】【情報発信】【言葉】【多文化理解】【多様性】【協働】【誘い】の9つのカテゴリーに分類された（表1）。一方、地域活動に参加しづらい理由としては、【活動内容】【言葉】【文化・考え方の違い】【被受容】【労働】【交通手段】の6つのカテゴリーに分類された（表2）。

表1：参加しやすい地域活動の要素

カテゴリー	重要アイテム
活動内容	楽しい企画（料理、祭り、ダンス、音楽、スポーツ、堅苦しくない）
	異文化交流（料理、食べ物、祭り、ダンス、子育て）
	日本文化を知る（着物、浴衣、祭り、正月、花見、盆踊り、紅葉狩り、風習の由来、冠婚葬祭マナー、弁当作り、折り紙、茶、生け花、簡単なもの）
	全員役割がある（料理、折り紙）
	企画者・指導者も楽しむ
活動規模	小規模から始めて大きくしていく
活動場所	居住地の近く
	公的な場所
情報発信	SNS
	QRコード
	見るだけで理解できる情報（イラスト、写真）
	地域生活サポーター、日本語がわかる人
言葉	多言語
	翻訳、翻訳アプリ
	通訳、通訳アプリ
	やさしい日本語
多文化理解	遠慮の違い
	文化の違い
	楽しみ方の違い
	人を迎える態度の違い
多様性	参加者の多様性
協働	外国人と日本人が協力して企画する
	日本人の受容的態度
誘い	同じ国の人からの誘い
	近所の人からの誘い
	日本人からの誘い
	体験してみたいことを勧める
	誰でも参加できる
	やさしい日本語で誘う

表2：地域活動に参加しづらい理由

カテゴリー	重要アイテム
活動内容・企画	必要性を感じない
	興味がない
	日本人による企画
	活動の仕組みがわからない
	申し込み方法が難しい
言葉	活動内容がわからない
	自分が参加していいかわからない
	参加しても言葉がわからない
	同じ国の人とかたまる
	地域に友人ができない
	日本語学習の問題（日本語教室に参加しにくい、継続が困難、高齢者は日本語を学習しない、読み・書き・漢字が難しい）
文化・考え方の違い	遠慮
	日本に来る前の教育
	人を迎える態度の違い（山梨はかたい）
被受容	日本人のグループに入りにくい
	日本人に歓迎されない
	誘いがないと行きにくい
交通手段	公共交通機関（バス）の利便性が低い
	バスの乗り方がわからない
	自動車がない
労働	長時間労働
	日曜日しか休めない

以下、参加しやすい地域活動のそれぞれのカテゴリーについて、重要アイテムを〈 〉で示し、参加しづらい理由と関連づけて述べる。参加者の語りは枠で囲んで挿入した。語りに補足が必要な場合は（ ）で補った。

【活動内容】としては、料理や食べ物に関する活動が多く挙げられた。また、祭りやダンス（盆踊り）のように〈楽しい企画〉、〈異文化交流〉や〈日本文化を知る〉ことができるような活動が参加しやすいという意見が述べられた。〈異文化交流〉に関する活動の中には、子育てサークルのように互助活動につながるアイデアも提案された。さらに、参加者全員に役割があることや企画した人も指導する人も誰もが楽しむとよい、という意見も出された。

B県（の事例）、私の友達はそこで活動していて、毎月1回、（会場名）で、そこのキッチン使って、（出身国の）料理作って、日本人にもあげて、外国人とかにもあげて、あのそれがいいかなと思っています。はい。（面接者：そういうことで日本人とのつながりもだんだんできていくということですか？）はい、そうですね。

初めて日本に来た時に（紅葉を見て）葉っぱが全部落ちて、なんかかわいそう、死んじゃったなと思った。外国人の発想と日本人の発想が違うんですね。説明しながら、そういう面白いエピソード（を話せば）、みんな笑ったり楽しくなるんじゃないかなって思った。なんでお花見をするのか、最初は誰も（花を）見てないんじゃないか、お酒ばかり飲んでる？ちょっと理解ができなかった。

（出身国の人たちは）お弁当作りが習慣じゃない。最初はお弁当をどうやって作るかわからないから。外国人のためにお弁当作り（教室）があれば（いいと思う）。前から考えていたんだけど。

みんなでやるね。みんなで分担。できない人は（餃子を）茹でればいい。みんなで作る。できない人は食べるだけ是可以する。要するにみんな参加する。一人残らず参加する。

教えてるとか企画をしている人たちも楽しみだと思えます。久しぶりに（着物を）着ても楽しくなるし、やっぱり教えてる人間も楽しくなれば覚えてる人にも楽しく伝わる。楽しくなるよ。

【活動内容】に係る参加しづらい理由として、活動に参加する〈必要性を感じない〉、活動内容に〈興味がない〉、〈日本人による企画〉である、という重要アイテムが抽出された。また、〈活動の仕組みがわからない〉、〈申し込み方法が難しい〉など、日本社会では一般的なルールや習慣などを知らないことで参加意欲が低下することが明らかとなった。

外国人も参加したいと思わないと、なかなか日本人が企画しても…。

県の方からいろいろ活動（参加促進の情報提供）があるんですけど。見るだけで終わり。なんか参加したくない。そういう感じです。

どういう風に参加していいとか、自由かどうかわからない、お金かかるかどうか分からないとか、一回入ったらすぐ帰れるかどうか分からないとか、（終了まで）縛られるんじゃないかなとか、けっこうそういうふうに聞いたことあるので。わからないんだから参加しない人が本当に多いと思います。

日本と国際的に一緒にやりたいんですけども、どこに申し込めばいいですか？それがわからない。探すのがちょっと難しいと予約をするのもなんか。外国人だからちょっと遠慮して。

【活動規模】として、〈小規模から始めて大きくしていく〉というアイデアが提案された。【活動場所】を〈居住地の近く〉にすることで、【交通手段】の問題による不参加が解決するという意見が出された。また、私的な場所ではなく〈公的な場所〉で実施するとよいという意見が出た。その理由として、近隣住民との間に〈人を迎える態度の違い〉があり、具体的には、私的空間に迎え入れることに抵抗を示された経験が複数の参加者から述べられた。

隣の門のところしか入ってない。玄関には入らせてくれないの。難しいね。私は隣の奥さんをうち呼んでご飯一緒に食べたことある。どういうこと？知らない…わからない…。

（人を自宅に誘うとき）汚いけど、ごめん許してねとか、今日はもうこれしかないんだけどかって、別に気にしない。いちいちすっごい準備して呼ぶっていう気持ちは全くないので。多分その…山梨はかたいて気がするんですね。私いろんなところに住んだことがあるんですけど、山梨、多分一番かたい…（複数の笑い声）。

【情報発信】に関しては、〈SNS〉や〈QRコード〉、〈見るだけで理解できる情報〉を活用したり、外国人地域生活サポーターや日本語がわかる人が発信したりして、活動の内容や参加方法が正しく伝わることの重要性が述べられた。〈活動内容がわからない〉ことや〈自分が参加していいかわからな



い〉ことが関係するという意見であった。これに関連して、【言葉】については、〈多言語〉による〈翻訳〉や〈通訳〉が必要であるという意見が述べられ、〈やさしい日本語〉や〈見るだけで理解できる情報〉を使うことが必要であるという意見も出された。

日本人の方達がすごく一生懸命、いろんなものを考えてくれて、作っていただいているんですよ。情報がちゃんと行届かないと、それができない。情報をちゃんと理解してなきゃいけない。
地域（生活）サポーターを増やして、どんどん。SNS を使って情報を出した方が絶対効果的だと私は思っています。
言葉がわからなくても、例えば紅葉って写真とか絵とか。説明をするときに、必ず目で見るとの、絵を使って説明をすれば、言葉がわからなくても（理解）できるんだと思います。
（やさしい日本語は）幼稚園の子どもに説明するように、敬語を使わない、難しい言葉を使わない、本当に簡単に絵本に書いてあるような感じの言葉で。

【多文化理解】としては、飲酒機会のような楽しい場面において日本人は〈遠慮〉しているように見える一方、自国の人たちは賑やかにするなど、〈楽しみ方の違い〉や〈文化の違い〉を理解し合うことで、一緒に活動しやすくなるのではないかという考えが述べられた。前述した〈人を迎える態度の違い〉についても、一つの文化として受け止めていることがうかがえる発言があった。また、〈遠慮〉に関しては、日本人に対して感じるだけではなく、外国人が日本の文化や日本語がわからないことで生じる〈遠慮〉もある。さらに、Cさんの出身国では、〈日本に来る前の教育〉として、当時の政府から日本での活動には参加しないように言われており、その考え方が残っている世代にとって、そのような教育を受けたことが活動に参加しない理由となっていることが窺われた。

ビールを飲んでも日本人は自分で飲みます。（出身国の人たちは）全然違います。乾杯とか、どうぞどうぞ、みんなそういう感じでやりました。性格はいつも賑やかで（イベントを）やります。日本人はいつも静かでシーン（静か）でなんかやります。遠慮しているかなと思ってて。
入れ墨ですよ。それも一つの文化です。別に刺青（をすること）は悪いことではないし、これはおしゃれ、髪を染めるといっしょ、マニキュアを塗るといっしょ、シャドウをつけると一緒っていうこと。わかるだけでもかなり近くなるなって。
（人を迎える態度の違いは）一つの文化としてだと思っんですね。大阪とか沖縄とか、みんな（山梨とは）全然違う。みんなすごく Welcome で楽しい、ラテン系だなんていう感じがします。
もともと考え方が違うね。私たち、まず遠慮します。日本人の祭りがあれば、うちはちょっと覗いただけでいい。一歩外へ出れば外国だから。教育を受けた。（日本に来る前には）そういうこと言われたね。パスポートの後ろにも書いてある。今の人たちのパスポートは書いてないけどね。活動に参加してはいけない。

【多様性】としては、出身地が多様であるだけではなく、大学生のような若い人も誘う、といった〈参加者の多様性〉が求められた。

近くの大学生も入れて、やっぱり若い人たちにもこれから社会に出て、いろんな外国人にもあったり、いろんな文化にあったり（して欲しい）。若者のアイディアも若者の気持ちも入れて、できればいいんじゃないかなって。
---

【協働】に関しては、〈外国人と日本人が協力して企画する〉ことや〈日本人の受容的態度〉の必要性が述べられた。この意見は、すべての参加者に共通していた。〈必要性を感じない〉〈興味がない〉

【活動内容】となっていたことの理由の一つに〈日本人による企画〉が考えられる。〈外国人と日本人が協力して企画する〉ことのメリットとして、〈日本人のグループに入りにくい〉〈日本人に歓迎されない〉と感じている外国人が〈同じ国の人からの誘い〉を受けて参加しやすくなることが考えられる。

なんかやる時に、必ずやる前に何をするか決めるのも外国人の人たちに相談した方がいい。どうしてっていうのは、日本人がいいと思っているものと、外国人がいいっていうものと違うんですよ。すごく一生懸命考えててつくってても、う～んっていうものたくさんあるので、もし本当にうまくしたいんだったら、必ず一緒に考えた方が絶対いいです。もちろん意見の違いとかいろいろあるかもしれないけど、でもうまくまとめられれば、それが一番いいんじゃないかなって思います。

外国人側も自分でなんとかしようとか、みんなと仲良くしようっていう気持ちもないと駄目だと思いますけど、勉強しようとか覚えようとかいう気持ちがあれば、多分お互いの気持ちが大事ですね。外国人の気持ちも大事だけど、日本人の受け入れる、教えるとか、一緒にいようっていう気持ちがないと、うまく一緒に活動はできないんじゃないかなって、そういう風を感じています。

(企画するときに、出身国が同じ人を) 一緒に入れた方がいいかなと思っています。それで声をかけたら来やすい。

【誘い】としては、〈同じ国の人からの誘い〉以外にも、〈近所の人からの誘い〉や〈日本人からの誘い〉、〈誰でも参加できる〉という【誘い】が期待されていることがわかった。また、未習得の日本文化・習慣に関して〈体験してみたいことを勧める〉ように誘って欲しいという意見も出た。

その(祭り、盆踊り大会の)前に、なんか教室あればいいかな。教えてくれるからねと一緒に参加できるかなと思ってんだけどね。いつもね、盆踊りに行ったら、やっとちょっと覚えたらと思ったらおわり。やっぱり誰かが手を引っ張って盆踊りなり食べ物なり文化なり「試してみる？」とかって(誘って欲しい)。最初はそういうもの(誘い)が必要じゃないかなって私は思っています。

## 2) 外国人コミュニティにおける課題

以下のように、医療通訳不在／不足の問題、介護、子育て、教育など、外国人地域生活サポーターがかかわっているコミュニティには様々な課題が存在し、それぞれの背景に【言葉】の問題があると認識されていた。また、生活の中で困ったことがあったときに相談できる人がいないという現状も述べられた。

一番の問題は言葉なんですけど、あのやっぱりあのその外国人本人が困り感を感じて、勉強、真面目に勉強する考えがないと、なかなか日本語を覚ええない。

結構前に来た人がだんだん高齢になって来て、やっぱりその言葉が。若い子たちは日本の学校に行って日本語を覚えているんですけど、世代の上の方たちは日本語ができなくて。これから年をとって、あの例えば、デイサービスに行ったりとか、病院に行くにも言葉がわからなくて。

参加しやすい日本語教室とか、そういうのも地域に必要だと思います。

<p>日本語わからなくて、病院に行ったり、妊娠で健診に行ったり、子どもを育てることも、結構全くわからない。それが相談事、結構多いですので、それは困るなどと思って。妊娠して（病院に）行って、いろんな検診がありますよ。あの手続きも面倒臭い。なんか検診したい時に、市役所に行って、保健師のところから、母子手帳とかもらわないといけないし、まあ日本の制度はいいんですけど、私にとっては。ほかの人は、なんか面倒くさいなどと思って、なんで勝手に病院行っても検診できないですか？簡単に（と言っている）。でも日本のルールだから。</p>
<p>相談ができる家族がない方も結構多くて。私たちね、子どもの頃に、おばあちゃんの家に行ったり、おじさんおばさんの所（に行ったり）とかあったんだけど、日本にいる方がそういう方が周りにはなくて、なかなか相談ができないっていう部分がすごくあると思います。</p>
<p>Dさんは子育て（中）で、小さい子がいて。そういうサークル的なものも作ってもいいんじゃないですか？なんかあのママ友って集まって。日本人のお母さんとか情報交換とか私の国の言葉とかこうとか。なんかそれもいいかなと思って子育てとか。言葉、言葉を乗り越えて何かできたら…そうですね。</p>
<p>私自身も子どもが生まれて初めて保育園に通うことになって、資料が全部、日本語。そして初めて、あ、これは、自分が勉強しないといけないと感じて、近所（の人）に聞いたり、先生たちに聞いたり。それからやっぱり子どもがいると必要性を感じて、少しずつ勉強して。</p>

#### 4. 考察

##### 1) 参加者の性質とデータの信頼性、妥当性

本研究では、外国人が参加しやすい地域活動に対する意見やアイデアを抽出し、今後の地域活動の企画に活用することを目的とし、グループインタビュー法を用いた。この手法の実施にあたっては、次の4点に配慮し、信頼性と妥当性を高めた。第一に、対象者は、山梨県知事政策局国際戦略グループの担当者の協力を得て、外国人に対して地域活動への参加促進の役割を担っている外国人地域生活サポーターから選出した。サポーターは、制度が設置される前から山梨県国際交流協会や地域の日本語教室等で活動してきたコミュニティのキーパーソンであり、これまでに外国人の地域活動への参加度が低い現状、およびコミュニティや個人のニーズを外国人の身近で把握しており、外国人が参加しやすい地域活動の条件を明らかにするためにふさわしい対象であると考えた。また、可能な限り多様な意見を収集するよう、つながりのあるコミュニティが偏らないように選出した。第二に、質問内容は、外国人地域生活サポーターや彼女らが関わっているコミュニティに属する住民が抱える課題やニーズを表現しやすいよう具体的な内容とし、半構造的に設定し、参加者がインタビュー中に自由に意見を述べやすいように配慮した。第三に、グループインタビューの進行に関しては、ピアカウンセリング<sup>9)</sup>の経験を積んだインタビュアーが担当し、インタビュー中は、平易な言葉で問いかけ、可能な限り参加者の自由な発言を促し、顕在的および潜在的な課題やニーズを把握できるよう配慮した。さらに、異なる文化や生活様式を持つ参加者同士がそれを受け入れ合い、効果的なグループダイナミックスが起これ、活発で有効な意見交換となるようにして意見やアイデアを抽出した。

##### 2) 外国人住民が参加しやすい地域活動とは

最も強いニーズとして挙げられたのは、外国人と日本人の【協働】であった。参加しづらい理由として、日本人による企画であることが指摘された。外国人と日本人が協力して企画した活動に関する



先行研究として、渋谷<sup>10)</sup>は、各自治体にある国際交流協会を主な対象とした調査の結果から、多文化フェスティバルに向け外国人と企画し運営していく過程での交流を大切にしている団体、準備段階からの日本人住民、在住外国人、ボランティアスタッフといった多様な属性の人たちによる協働作業を積極的に評価している団体の存在を報告している。今回のインタビュー調査結果からも、外国人と日本人が協力して企画する過程で、お互いの文化・考え方の違いなどに気づいたり、誰もが簡単に理解できる新しいルールや仕組みをつくったりする機会、つまり、多様性ある「協働の場」が構築される可能性が示唆された。また、企画段階からかかわる者が多様になれば、地域活動への参加の誘いも多様になったり、言葉・情報発信に関する課題も解決できたりして、参加促進が期待できるのではないかと推測した。一般に、多文化共生のイベントに関して、主催者がホームページやチラシなどで公開している情報を見る限りでは、誰がどのように企画したのか示されていないことが多い。地域活動を多様な人たちの協働によって企画したことを公表すること、加えて、今後の企画についても、誰もが企画から参加できることを広く周知することが必要ではないかと考えた。

外国人地域生活サポーターは、参加者全員に役割があることとともに、企画者・指導者も楽しむことができる活動を望んでいた。また、人を迎える態度の違いに話題がおよび、他の地域に比べて「山梨はかたい」という印象を持っているという声も寄せられた。従来の「一方向型地域活動」では、日本人が「支援する者」「ホスト」となり、参加者とともに楽しめていなかった可能性が考えられる。また、外国人も「支援される者」「ゲスト」という立場では、日本人とともに楽しむことが難しかったのではないだろうか。日本語教室における居場所づくりに関する先行研究では、宮崎<sup>11)</sup>により興味深い結果が報告されている。地域日本語教室が外国籍市民と日本人ボランティアにとって「協働型居場所」として機能するための5因子を「役割感、肯定的他者関係、被受容感、否定的他者関係、社会参加」とした「居場所づくり尺度<sup>12)</sup>」を用いて、外国籍参加者と学生ボランティアの「居場所感」を比較したところ、外国籍参加者より学生ボランティアの方がほとんどの項目で評価が低かった。また、石塚<sup>13)</sup>が同様に地域日本語教室の参加者の「居場所感」を調査した結果、学習者の社会参加感が高い一方で、支援者の「役割感」が低いことを報告している。日本語教室における支援者の「居場所感」の低さには、きちんと教えられず自信が持てないことによる「役割感」の低さが関与していた。「役割感」の低さは、教えるボランティアとしての役割のみが注目されていることによると考えられている。山梨に移住した人が感じる特有の「かたさ」は、ゲストを迎える前に十分に準備を整えなければならないという役割に注目している結果と言い換えることができるかもしれない。準備ができないから受け入れられないという姿勢から、準備から一緒に楽しもうという姿勢に転換する必要性があると考えられる。前述<sup>13)</sup>の日本語教室では、支援者の「役割感」を高めるために居場所感アンケートの結果をフィードバックするなど様々な取り組みを重ねたところ、支援者はきちんと教えることの縛りから自由になり、「役割感」を得やすくなっただけでなく、自発的な行動へと姿勢も変容していったと報告されている。以上のことから、本研究で得られた地域活動を実現するためには、参加者の「役割感」を評価してフィードバックすること、次の活動に「役割感」が高まるように活用すること、そして、それを継続していくことが有効ではないかと推測した。

次に、参加しやすい活動内容・企画について述べる。7割もの外国人住民が地域活動への参加意向を示す横浜市<sup>14)</sup>では、各地区に国際交流ラウンジが設置され、市内在住の外国人と日本人との交流活動を行うため「食の国際交流」、「異文化理解講座」、「日本文化紹介」などのイベントが開催されてきた。今回のインタビュー調査でも、異文化交流や日本文化の理解を目的とした楽しい活動内容が多く

挙げられ、横浜市で実施されている交流会の内容と一致していた。しかし、山梨県は、横浜市とは都市の規模や在住外国人の分布が異なり、同様の拠点を設置し、同様の規模や頻度で交流活動を実施することは困難であるかもしれない。今回の調査で提案されたように、小さな規模から始めて、継続できる頻度で実践しながら、適した規模に展開していくのが望ましいと考えた。

最後に、すべての協力者が、地域活動に参加しづらい理由として、言葉の問題（日本語教室が参加しにくい、学習継続が困難）を指摘していた。本間<sup>15)</sup>は、在住外国人の母親と相互に料理を紹介・試食する活動（料理交流会）を実施した経緯と活動を継続的に実施した成果を報告している。活動を通して、当事者の日常生活のニーズに目を向け、相互に新たな役割が得られる契機を見つけることの必要性を示唆している。本研究において、参加しやすい地域活動の内容として、料理や弁当づくり、冠婚葬祭マナー、季節の風習の由来などが挙げられた。また、「やさしい日本語」を使うことの重要性も述べられた。地域活動に参加する日本人は、普段何気なく実践している日常の習慣の由来をあらためて学び「やさしい日本語」で言語化することを学ぶ。日本語学習者は、日常生活で興味を持てるテーマの活動に参加する中で楽しみながら「やさしい日本語」を学んでいけたら、相互に学び合う役割ができ、学習継続につながるのではないかと考えた。

### 3) 外国人が参加しやすい地域活動に期待されること

困りごと（医療、介護、子育て、教育）を相談できる人がいない、相談できる場がないことは、少子高齢化や核家族化が進んでいる日本では、在住外国人コミュニティに限らず、どの地域でも起こりやすい課題である。今回のインタビュー調査中、育児中のDさんにはお子さんが同席していた。その様子や日本での妊婦健診や育児に戸惑う在住外国人の話を受けて、Bさんから多様な子育てサークルのアイデアが創出された。Bさん自身も子育ての経験があり、その中で日本語を学んだことが語られた。日本人の親も子育て中に孤立しやすいことが指摘されている。母語の違い、文化や考え方の違いがあっても、それらを楽しく紹介する交流の場があれば、親は育児という役割のみに注目することなく、居場所ができ、育児中の孤立を防ぐという共通の課題解決につながることを期待できる。このように、地域の構成員として、日常の交流活動でつながり、かかわりを持つことで、お互いの困りごと解決のために必要な情報を共有する関係の構築が期待される。

## 5. おわりに：今後の課題

本研究の結果から、双方向型地域活動を多様な人々とつくっていくという今後の活動の方向性が得られた。本研究で明らかになった条件を満たす活動を多様な参加者によって企画し、実施し、継続していきたい。また、筆者らは、参加者の役割感の評価とその結果の活用により、地域活動が参加者全員の居場所となるようなかかわりを持っていきたいと考えている。そして、筆者ら自身が一人の地域の構成員としての役割感を得て、大学教員の「教えるイメージ」から、「ともに学ぶ仲間イメージ」を共有してもらえよう、楽しみながらかかわりを深めていきたい。

本研究に基づき、すでに実際の活動の企画を始めている。本研究の協力者4名は、今後の地域活動に企画から参加する意向を示している。さらに、4名以外にも地域の外国人住民、日本人住民ともに企画への参加者が増えつつあることを、報告する。

## 6. 謝辞

本研究にご協力いただきました山梨県外国人地域生活サポーターの皆様にご心からお礼を申し上げますとともに、ご活躍をお祈り申し上げます。

山梨県知事政策局国際戦略グループの外国人地域生活サポーター担当（当時）早野浩晃氏のご尽力のおかげで調査を実施することができました。ここに謝意を表します。

本研究は、山梨県立大学地域研究交流センター重点テーマ研究助成費の助成を受けて実施した。

## 7. 引用参考文献・資料

- 1) 山梨県：山梨県在留外国人アンケート調査2019 調査結果報告書，（2020）[https://www.pref.yamanashi.jp/gaikoku-g/zairyuugaikokujin\\_chousa.html](https://www.pref.yamanashi.jp/gaikoku-g/zairyuugaikokujin_chousa.html)（2022年10月1日）
- 2) 長坂香織・鳥居美佳子・名取初美・城戸口親史：多文化共生推進プロジェクト：保健・医療・福祉における大学・地域・行政の連携に向けて，山梨県立大学地域研究交流センター 2013年度研究報告書（2014）
- 3) 長坂香織・萩原孝恵・奥村圭子：外国につながるのある就学前児童のためのプレスクール構築に向けて，山梨県立大学地域研究交流センター 2014年度研究報告書（2015）
- 4) 萩原孝恵・箕浦一哉・斉藤祐美・小林信子・原田かおり・川手ちなみ：〈学びの支援〉に焦点をあてた日本語支援活動：山梨県内の活動の新たな発展に向けて，山梨県立大学地域研究交流センター 2015年度研究報告書（2016）
- 5) 小尾栄子・村松照美・渡邊輝美・石原敬子・佐野亀久子・加藤順彦：在留外国人の妊娠・出産・育児期における行政保健師の支援，山梨県立大学地域研究交流センター 2016年度研究報告書（2017）
- 6) 萩原孝恵・池田充裕・斉藤祐美・小林信子・原田かおり・川手ちなみ：日本語指導が必要な外国人児童生徒のライフチャンス—高校進学から卒業までの支援体制構築に向けて—，山梨県立大学地域研究交流センター 2019年度地域研究事業研究報告書（2020）
- 7) 坂本文子：在住外国人の地域コミュニティ参加に向けた中間支援の役割と可能性—栃木県中核都市 A 地区におけるアクションリサーチ—，宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要6，35-48（2019）
- 8) 安梅勅江編著：ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅲ／論文作成編 科学的根拠に基づく質的研究法の展開，医歯薬出版（2010）
- 9) 岩間淑子編集・高橋真美子翻訳：ピアカウンセリングマニュアル，社会福祉法人 JHC 板橋会（1998）
- 10) 渋谷努：多文化に関わるフェスティバルの現状と課題—アンケート調査の結果をもとに—，中京大学社会科学研究42(2),185-218（2022）
- 11) 宮崎幸江・河北祐子：地域の資源としてのボランティア日本語教室—多文化型「居場所づくり尺度」の観点から—上智短期大学紀要32，51-65（2012）
- 12) 石塚昌保：「協働型居場所づくり尺度」の開発—地域日本語教室の調査から，東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター シリーズ多言語・多文化協働実践研究13，31-52（2011）
- 13) 石塚昌保・河北祐子：地域日本語教室で居場所感を得るために必要なこと—「多文化社会型居場所感尺度」の活用—，日本語教育155，81-94（2013）

- 14) 横浜市：令和元年度 横浜市外国人意識調査 結果, (2020) <https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/koho-kocho/press/kokusai/2019/fr-chosa01.html> (2022年10月1日)
- 15) 本間淳子：在住外国人の母親にとっての居場所の意味—生活と学習を結ぶ協同的な活動の生成—, 北海道大学大学院教育学研究院社会教育研究室 社会教育研究34, 49-62 (2016)

## Research on Building Diverse Social Partnerships and Collaborations: Considering Local Activities with "Foreign Community Life Supporters"

TORII Mikako <sup>\*1</sup>, OTSUKA Yukari <sup>\*1</sup>, SATOMI Tatsuya <sup>\*1</sup>, NAGASAKA Kaori <sup>\*2</sup>

Key words :

Diversity, Intercultural Cohesion, Collaboration, Community Activities

---

\* 1 Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University

\* 2 Faculty of Nursing, Yamanashi Prefectural University